

わが国最初の高原避暑地宮ノ下と箱根 — 明治期を中心に —

齋 藤 功

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| I はじめに | III-3 外国人別荘の建築と宮ノ下 |
| II 初期の外国人と旅行制限 | IV 滞在型避暑地箱根 |
| II-1 横浜居留地と外国人の遊歩区域 | IV-1 幕末の箱根宿 |
| II-2 暑中休暇と旅行制限の緩和 | IV-2 外国人の眼からみた滞在型避暑地箱根 |
| III わが国最初の避暑地宮ノ下 | IV-3 『日本旅行案内』にみる宮ノ下と箱根 |
| III-1 明治初期の宮ノ下 | V むすび |
| III-2 外国人専用ホテルの設立と外国人旅行者の増大 | |

I はじめに

リードによれば、東南アジアで発達した高原保養都市 (hill station, mountain resort) は、すべて植民地時代に造られたもので (Reed, 1976a), マレーシアのクアラルンプール近くのジェンティン・ハイランド (Genting Highland) は唯一の例外であるという (Reed, 1976b). 軽井沢などわが国の高原避暑地も外国人の影響で成立したことは、田中 (1934), 市川 (1966) によって明らかにされている。また、宮原 (1991) は軽井沢の避暑地の成立過程を宣教師やミッションスクールの行動に関連させて詳細に究明している。一方、外国人の多かった避暑集落軽井沢の雰囲気は、地元佐藤 (1911) などによって早くから紹介されていた。これらのことは、日本における高原避暑地も日本における外国、つまり外国人居留地 (foreign settlement) に強く関連して形成されたことを示唆するものであろう。

周知のように1858年 (安政5) の通商条約によって、翌年函館、神奈川 (横浜)、長崎が開港され、新潟、東京 (築地)、大坂、兵庫 (神戸) も順次開港されることとなった。外国人居留地は、銀行、株式会社の商館などの新しい経済制度を日本にもたらしたばかりでなく、テニス、競馬などのスポーツ活動、牛乳やパンなどの洋食、キリスト教などの文化活動を普及させる拠点となった (横浜開港資料館, 1988)。なかでも最も発達した外国人居留地は、横浜と神戸であった。したがって、その近傍の山地である箱根や六甲山に避暑地が形成されたのは、当然の帰結であったといえよう。

本来、高原避暑地はイギリスの植民地インドで開花したものである。すなわち、ヒマラヤの山麓でのグルカ戦争に赴いたインド軍のなかに、元気を取り戻した士官が存在したことから、駐屯地の近くに病気の療養と予防を兼ねてサナトリウムが造られた。赤痢、マラリア、コレラなどの伝染病の淫浸地域であった熱帯地域、とくにイギリスのインド支配の拠点カルカッタのあるベンガル地方においては、病気の蔓延を避けて転地予防 (避病) することは重要な罹病回避の手段であった。したがって、サナトリウムの機能に疲労回復、さらにはモンスーンの熱波を避けて仕事の能率化¹⁾をはかる避暑機

能を付け加えたのが、高原保養都市であり、高原の避暑地であるといえよう。高原避暑地の蒿矢といわれるヒマラヤ山麓のシムラが、当時のイギリスのインド植民地支配の拠点カルカッタからの避病、避暑の目的で形成されたのは、当然の帰結であったといえよう。筆者はわが国の高原避暑地もこのようなパラダイムのなかで考察する必要性を感じていたので、既往の文献を渉猟し、高原保養都市のインドおよび東南アジアへの伝播および高原保養都市の共通性について概観した(斎藤, 1990a)。一方、熱帯の高原保養都市には、本来そこに供給するために栽培された温帯野菜の生産が盛んである。その点に焦点をあてつつ、台湾中央山地(斎藤・陳, 1984)やスマトラ島のカロ高原(斎藤, 1990b)についても報告した。

ところで、日本で最も有名な避暑地は軽井沢である。しかし、避暑地軽井沢の成立以前に、宮ノ下や箱根、日光と中禅寺が存在したのではないかという疑問が私のなかに残った。それは、熱帯医学の立場から高原保養地の効用を説いたサンドウィズが、日本の避暑地として箱根、日光、中禅寺湖の3ヶ所²⁾を挙げているだけだからである(Sandwith, 1907, 367)。そこで、筆者は軽井沢以前の避暑地の一つとして日光・中禅寺湖畔の避暑地の様相を前述のパラダイムにそって報告した(斎藤, 1991)。

本稿の目的は、外国人居留地のなかでも最も発展した横浜に近く、わが国最初の避暑地であると考えられる宮ノ下と箱根に焦点をあて、主として外国人の記録を頼りに高原避暑地の形成、就中その国際性の様相を解明することである。その際、熱帯に発達した高原保養都市と温帯である日本に発達した避暑地との共通性と異質性に注目したい。というのは、シムラなどの避暑地は夏の政庁(summer capital)としての機能を持ち、総督邸を始めとする行政施設、西洋人専用居住区、ショッピングモール、教会、学校、スポーツ・文化活動のクラブが設立される場合が多かったからである。また、本稿では宮ノ下、箱根が、1886(明治19)年に避暑が始まったとされる軽井沢よりも早くから開発された様相を明らかにしたいので、対象時期を明治期に限定した³⁾。

II 初期の外国人と旅行制限

II-1 横浜居留地と外国人の遊歩区域

安政の通商条約によって開港場が指定され、外国人はその居留地に居住することが定められた。しかし、居留地の整備が遅れたところでは、その周囲が雑居地に指定されたこともあったが、外国人の行動は公使および領事を除き、その居留地から十里四方以内の遊歩のみに限定された。ジャパンヘラルド、ジャパシカゼットの編集者であったブラックは1863年当時「条約上の境界線の半径は、ちょうど十里、すなわち二十四マイル半余であったが、・・・この境界を越えて行った者は、出会う人から引き止められて、もと来た所へ連れ戻される心配をしながら、越えて見た。このことはすべての友人に、とてもヒロイックな素晴らしい事件として語る値打ちのある・大胆な行為として、話された」(ブラック著ねず・小池訳, 1970, 1, 215)と書いている。

境界を越えて行ったの事例は鹿野山への旅行、遊歩区域内の悲劇的事件は明治維新の到来を早めたといわれる生麦事件であろう。横浜の居留地や山手から東京湾を挟んでよく望める鹿野山は、好奇の対象であった。すなわち、ブラックは、明治維新以前に「われわれは甲板のないボートで、江戸湾を

横切って房州地方のある村に上陸した。一行は三人だった。二人は、獲物をたくさん見つけたがっている熱心なスポーツマンで、三人目の男は、『九十九谷』という名前から、読者にも想像のつきそうな眺望を見おろせるという岡〔鹿野山＝引用者註〕にたどりつこうと、一所懸命だった。ここは、比類のない、美しい地点だ、といわれていた。そこで溢れるばかりの好奇心をもって、われわれはそこを目ざした」と初めての土地を訪れる勇敢な行為と初めて外国人に接した日本人のとまどいや親切、そして結果的に一泊して狩りを楽しみ、雨模様で仕方なく横浜に帰った人の話をあげている（同上、1, 215-222）。

横浜居留地の場合、遊歩区域は、北は多摩川、西は大山と花水川、南は鎌倉を含む三浦半島（先端を除く）までであった。しかし、この範囲内にあっても「旅行はたいてい馬に乗って行った。多くの居留民はめいめい馬を持っていたし、また貸馬屋がたくさんあって、見物人はここから適当な馬を賃借りした」（ブラック著ねず・小池訳、1970、2、20）という。しかし、好奇心に富む外国人にとっては、居留地や山手および遊歩区域、さらには江戸への行き帰りにみられる富士山、箱根連山、秩父連山、遠くにみえる浅間山、榛名山、赤城山、男体山などが、鹿野山とともに訪れてみたい場所であつたらう⁴⁾。というのは、イギリスの著名な外交官アーネスト・サトウ（当時通訳官）が横浜の外国人社会（居留地）を「ヨーロッパの掃溜め」（サトウ著坂田訳、1960、I、27）と称したように、開港間もない居留地住民のなかには、インドや東南アジアの植民地に滞在した経験を有する一旗組や1820年代に発展したヒマラヤ山麓や南インド、ペナンヒルなどの高原保養都市を訪れたり、その効用のうわさを聞いていた者も存在したと考えられるからである。

このような旅行に対する外国人の要求は、居留地に住む人口が増大するにつれて高まってきたといえよう。すなわち、横浜開港後3年目の1861（文久1）年の居留地人口は、127人であったが、1865年（慶応1）年には1,130人に増加し、1874（明治7）年には2,411人になった。しかし、ここには中国人が1,290人含まれており、欧米人は1,121人であった。神奈川県統計書によると在留外国人の数は1880年の3,881（欧米人1,376）人から1990年の4,601（1,597）人、1900年の5,523（2,395）人となった。

II-2 暑中休暇と旅行制限の緩和

1872（明治5）年に御雇い外国人の休日⁵⁾が、従来の一・六休日制を改め、日曜日は終日、水曜日は午後をもってあてることになった。また、豪腕でなるイギリス公使パークスが1871年の夏から1873年2月まで賜暇（furlough）をとり、本国に帰還したことも長期休暇を日本で実施する根拠となったものであろう。

1872年の京都博覧会に際して、「四月十七日から五十日間、京都において博覧会が催され、その間は外国人は非常に簡単で、僅かな制限だけで、京都を訪れることが許されるという告示が出された。同様に、彼らはまた京都付近の名所を見物することも許された」（ブラック著ねず・小池訳、1970、3、180）という。それは外交文書272に「大坂兵庫両所ニ於テ其自国ノ領事ヘコノ入京切手ヲ渡スヘシ領事ヨリ之レニ其国名人名番号ヲ記載シ其印ヲ押し願人ヘ配達スベシ但シ入京ノ間所々ニテ右切手ヲ検査スベキ事アラハ之ヲ示スヘシ」（外務省編纂、1955、8、550）に相当し、京都と琵琶湖へ訪れるこ

とが許可されたのである。神戸居留地の住民をはじめ、外国人はかつての日本の首都、京都へ行く旅行を楽しみにした。

翌1873年、いわゆる御雇外人である外国人教師には、軍人、学者、技術者のいずれを問わず毎年7月23日から8月末日まで暑中休暇が認められた。1974年には日本政府は外国人の「内地旅行規則」を定める交渉に入り、翌年、公使館の申請により「研究・養生のため内地旅行」の許可証である旅券を交付した。この旅券（passport、旅行手形、旅行切手、旅行免状とも呼ばれた）には旅行者の国籍、姓名、身分、寄留地名、旅行趣意、旅行先及路筋、期限を記入し、旅行先の区長や警察官に提示を求められたら提示する必要がある。旅行目的が「研究・養生」に限られたのは、日本政府が外国人と日本人との直接取引（通商）を嫌ったからであり、安政の通商条約を不平等条約と感じていたからである（石井、1977）。したがって、日本政府は裁判権の及ばない居留地外に外国人が住むことは神戸の雑居地などを除いて認めなかった。ましては、外国人が居留地外に土地を所有することは、雑居地の土地も貸与しているのだから、到底認められるものではなかった。

1899（明治32）年の不平等条約の改正で外国人の内地雑居が認められた結果、従来の居留地が廃止されるとともに外国人の国内旅行は自由になった。しかし、それまで横浜の居留地の人々の間で最も初期に避暑地として利用されたのは箱根であろう。そこで、本稿では箱根に焦点を当てることによって、我が国最初の高原避暑地の様相を解明してみよう。

Ⅲ わが国最初の避暑地宮ノ下

Ⅲ-1 明治初期の宮ノ下

1810（文化7）年の「七湯のしおり」には宮ノ下に藤屋勘右衛門（安藤）、奈良屋兵治（安藤）、伊勢屋八右衛門、三河屋五兵衛、山田屋安右衛門の5軒の宿があり、底倉には梅屋又右衛門、薦屋平右衛門、萬屋伊兵衛、住吉屋源右衛門の4軒の旅館があったという。つまり底倉を合わせた宮ノ下の9軒の旅館には日本人ばかりでなく、外国人も訪れるようになるのである。

明治初期にも宮ノ下に湯宿は9軒存在したが、外国人は最も立派な奈良屋のみに宿泊したという。したがって、モリソンが1870（明治3）年の夏に宮ノ下を訪れた印象を「その頃の宮ノ下は、外国人にはあまり知られていなかった。はじめてそこを訪れた唯一の人は、横浜で発行された風刺漫画雑誌『ジャパン・パンチ』で名高い故ワグマン氏である。そのつぎに行った人は、私自身の事務所のバロー氏であると思う。・・・宮ノ下からのバロー氏の手紙には、山合いのなかに完璧な楽園を発見した、と書いてあった。かれが帰ってきてからの愉快的旅行のみやげ話に誘われて、翌年、J. フレイザー、H. バーロウ、A. ミルサム、それに私を加えた一行4人が宮ノ下に出かけ、バロー氏の話が全然誇張でないことがわかった。その当時、宮ノ下はお茶屋が一軒あるだけのひっそりした集落であった。しかし、そのお茶屋は広壮で、しかもまわりの自然と調和した閑寂な風趣のある建物であった。屋号を奈良屋という。・・・そのひっそりとした集落は奈良屋とその二三の離れ座敷からなりたっていて、ほかに木彫りの細工品を売る店が一軒か二軒あった。それらの木細工はいまでも宮ノ下独特のみやげ品である。外国の食品などというものが知られていなかったことはもちろんだ。そこであらゆる種類

の食料を荷馬に積み、給仕と料理人とをつけて一日か二日前に送ったものである」(コータツツイ著 中須賀訳, 1988, 344-345)。

翌1871(明治4)年、オーストリア外交官ヒューブナーはオランダ公使ファン・デル・フェーンの富士登山の誘いを受け、8月4日～5日他6名とともに宮ノ下に滞在した。すなわち、「村長は、日本人の家族を追い出して、我々を一番いい宿屋の一番いい部屋に泊めてくれた。・・・我々が泊まった茶屋、というか宿屋は、ひとつの廊下でつながれたいくつかの母屋からできていた。この宿屋をぶらぶら歩いてみれば、日本人の私生活を研究することができる。みんなここに湯治のために来ており、廊下の突き当たりの風呂場が集まって湯と水を交互にかぶるのだ。それからおのおの自分の部屋に引きこもるが、部屋は多かれ少なかれ四方を開け放たれていた」(ヒューブナー著市川・松本訳, 1988, 32-33)と湯治客と日本間の開放性の様相を観察している。このように宮ノ下温泉は明治初期には富士登山の基地としての意味合いを有していたといえよう。なお、アーネスト・サトウはこの1871年後述するようにヒューブナーと箱根に旅行するのであるが、その際湯本の三枚橋で「橋の右手を登ると一本の道が、横浜の人たちの好む避暑地である宮ノ下へと続いている」(サトウ著庄田訳, 1992, 2, 151)と記載している。

一方、『明治天皇紀』によれば1873(明治6)年8月3日の箇所に、「・・・今や維新の大業其の緒に就けるを以て、是の歳始めて百官に暑中休暇を賜ひて其の勤勞を慰したまふ、又臣らも炎暑を相模国宮ノ下温泉場に避けたまはんとし、是の日午前五時二十分皇后とともに」出発し、五日「午前五時騎馬にて小田原を發し、塔澤御休所に於て鮎を溪流に捕ふる天覽あり、八時三十五分宮ノ下に御着、行在所旅館安藤兵治の家に入り賜ふ、該行在所は、昨夏二旬余りに互りて皇后の滞留あらせられし所なり」。そして28日「午前七時騎馬にて宮ノ下行在所を發し、還幸の途に就きたまふ」(宮内庁, 1969, 112)と奈良屋に23日間泊まったという。この間、元箱根などを遊覧されているが、太政大臣三條實美や大藏卿大久保利通などとも会っており、完全なる避暑とはいえなかったように思われる。しかも、明治天皇の長期休養はこの時だけであった。しかしながら、1876年に皇后は療養のため8月29日から9月13日まで奈良屋に宿泊している。

Ⅲ-2 外国人専用ホテルの設立と外国人旅行者の増大

1) 富士屋ホテルの操業と顧客の争奪

米国帰りの山口仙之助は福沢諭吉の勧めで外国人専用の旅館経営を目指し、立地場所を物色していたが、1877(明治10)年に箱根宮ノ下の藤屋旅館(火事で焼けた後であった)を買収し、翌年洋式の富士屋ホテルを開業した(富士屋ホテル株式会社, 1958, 2)。これは横浜、神戸など居留地を除くと日光の金谷カッテージインなどとともにわが国の代表的近代的ホテルといえる。

1878(明治11)年に富士屋ホテルに宿泊したホルサムは、「2つのホテルのある宮ノ下は狭い峡谷の上の登ったり下ったりする傾斜地にある。私たちは昼食時に着いた。富士屋ホテルに泊まっている外国人の数は30人にのぼる」(同上, 9)と書き、開業当初から多くの外国人が滞在していたことがわかる。というのは、硫黄温泉で有名な芦之湯の松坂屋には1882(明治15)年の8月に21人、9月に

28人が宿泊しているが、年間でも85人であったからである⁵⁾。

クローによれば、1881（明治14）年当時においても、「横浜や東京の大多数の居留者とその家族は、景色がよくて健康的な土地柄にひかれて、夏と秋には宮ノ下に」きたという（クロー著岡田・武田訳、1984、232）。富士屋ホテルは「大きくて、不規則な形の建物で、主人は日本人だが、ヨーロッパ風の管理と調度で、ほとんど何でも小田原から運び上げなければならないことも勘定に入れるから、料金も一流になる。われわれのほかに、六人ほどの東京の婦人と紳士が滞在している。商売仇のホテルは奈良屋で、純日本風の宿だが、手入れがよく行き届いて美しく、富士屋より建物も見事なら場所もよい。富士屋がヨーロッパ人客しか受け入れないのに対して、奈良屋の方は日本人にも外国人にもとてもひいきにされ」と富士屋ホテルと奈良屋旅館の顧客の競合にも触れている（同上、232-233）。この当時、外国人の旅行には日本人のガイド（通訳兼コックの旅行案内人）が付き、彼らがホテル・旅館に案内した。特定のホテル専属のガイドもいたが、それ以外はチップの多い旅館に外国人客を案内したことが、顧客の争奪の一因であった。これは、箱根と並ぶ明治初期の高原保養地日光でも共通してみられた現象である⁶⁾。

ところが、1883（明治16）年12月の宮ノ下の大火で奈良屋旅館、富士屋ホテルとも類焼してしまった。しかし、翌年奈良屋旅館は2階建ての洋館を建設したが、富士屋ホテルは平屋であった。富士屋ホテルの本館の落成がなったのは、1891年のことであったという（富士屋ホテル株式会社、1958）。第1図はこの当時の宮ノ下の写真であるが、早川に沿った左手前の堂ヶ島温泉と比べると、奈良屋旅館（右）と富士屋ホテル（左）の建物は豪華で瀟洒な、外国人を惹きつけるリゾート性を有していたといえよう。

1884（明治17）年に宮ノ下の奈良屋に宿泊した神奈川県令 沖 守国は日記に「殊ニ七八月両月ハ内外人輻輳セリト云フ、湯本ヲ除キ諸村ノ浴客ヲ合算スルニ、五月ヨリ八月ニ至ル四ヶ月間、内国人五百三十三人、内男四百十三人、内女百二十人、外国人二百三十四人ナリ、以テ此地ノ営業半バ盛期ニアルコト推知ベシ」（箱根温泉旅館協同組合編、1986、91）とかなりの外国人が訪れていた様相が記されている。つまり、開国間もない日本において生活水準が高かった外国人は、必然的にこの設備のよい保養施設に集まるようになった。このことが、また両者の顧客の争奪を激化させる結果となったといえる。

1887年頃から顧客の争奪に関する話合いを続けた両者は、1893年協定を結ぶに至る。すなわち、「天方祐順氏の斡旋により、明治二十六年五月、山口仙之助、奈良屋旅館主安藤兵治両氏の間に宿泊營業に関する契約書並に附帯契約書を交換し、五月三日横濱區裁判所管内武蔵國横濱市弁天通陸丁目百二番地、公證人坂本三郎役場に於いて、公正證書を作成し、富士屋ホテルは外人客専門とし、又奈良屋旅館は邦人客専門とし、富士屋ホテルより奈良屋旅館へ一定の報酬金⁷⁾を支拂う事を約して茲に競争は終息した」（富士屋ホテル株式会社、1958、48）という。

このような事情を知ってか知らずか、東京の梅雨の蒸し暑さや夏の雷雨に悩まされたイギリス公使フレイザー夫人は、1889（明治22）年9月東京を脱出して熱海や箱根の宮ノ下で休息をとった。すなわち、「暑さは休息を奪い、空気を奪い、吸い込む風も生きる糧も奪ってしまいます。町の上には、



第1図 1892(明治25)年の堂ヶ島と宮ノ下
早川の川沿いの伝統的温泉集落堂ヶ島と段丘上の宮ノ下の近代的ホテル。右が
奈良屋で奥が富士屋ホテル。奈良屋の洋館と中段の五層楼は、関東大震災時の崖
の崩落によって倒壊した。「The Hakone District」より。箱根郷土資料館提供。

監獄の毛布のように重苦しく黒い空が、熱い雨や雷をいっぱい蓄えて垂れこめています。それが破れますと私たちはほとんど濡れんばかりになり、その洪水の後に太陽が出ますと、暑さは以前にもましてひどくなります。休みなくじりじり焦がされたり蒸気で蒸されたりするような熱気で、その苛酷さはいいようがありません」(フレイザー著横山訳、1988、94)と彼女は欧米の外国人が梅雨の蒸し暑さを熱帯の気候のように感じた共通性をよく表現している。フレイザー夫人は国府津で鉄道から軌道馬車に乗り換えて湯本まで行き、人力車とチェアーで富士屋ホテルに到着している。彼女は富士屋ホテルと宮ノ下の印象を「ほとんど全体がヨーロッパ人のためにこしらえられていて、日本間は、庭のなかの背の低い数軒の建物にあるだけで、それらは独身者の一画と呼ばれています。G氏と彼の犬たちと研修生たちはそこに落ち着き、私とN夫人は三階の美しい部屋をいくつかとりました。そこからは、谷を見おろす眺めが大きく開け、しかも、さほど遠くないところにつやつやとした廊下があり、お風呂には、その上をスリッパでパタパタとゆくのです。・・・この村にある数軒の木工品店のいくつかに飛び込んでみたのです。いずれもうす暗くひんやりした店で、すばらしい作品であふれ、それらにかなりのお金を費やしても、じゅうぶん満足できると思われました。作品そのものは、大部分が寄木細工ですが、浮き彫りや雷紋の透かし彫りと取りあわされて千通りもの美しい模様になります。屏風類はことに優美で、各パネルには四角い繊細な格子窓が開けられています。格子はたいてい白木でそれがはめこまれた周囲は、多くの色が配された象嵌細工になっており、パネル全体の外枠は、豊かに彫刻がほどこされた黒檀なのです。これらは純粋に日本のもので、箱や飾り筆筒も同様です。ところがそのそばに、ヨーロッパ人の眼を喜ばせようとして作られたひどく醜い書き物テーブルが並んでいます。・・・全体に宮ノ下の商店には外国の要素がかなり目立ちます」(フレイザー著横山訳、1988、95-97)と記している。この骨董店の多い様子は、後年の日光・軽井沢にも共通するもので、宮ノ下には現在でもその面影が残っているといえる。

その当時宮ノ下を訪れた大町桂月は1899年「海を抜くこと千尺餘、早川より三百尺高く、眺望や、開けたり。温泉宿最も壮麗にして、箱根温泉中の宮殿と謂うべし。富士屋は洋館にして、西洋人のみ客とす。奈良屋は和洋二館あり。奈良屋の下に龍雲館あり、崖によりて五層楼を築けり」(大町、1922、6)と書いているが、これは第1図の写真を彷彿させるものである。なお、この五層楼は富士屋ホテルに買収された藤屋旅館の娘が経営したものであるが、残念なことにこの五層楼は奈良屋の洋館とともに関東大震災で崩落したという。

2) 外国人避暑客の顧客圏と滞在期間

ここで富士屋ホテルに残されている宿泊者名簿(Register Book)を手掛かりに外国人避暑客の顧客圏と滞在期間の様相をみてみよう。1885年から残されている宿泊者名簿の記載様式は年によって異なる⁸⁾が、1892年-1899年には到着日(date of arrival)と出発日(date of departure)と何処から来たか(where from)が記載されている。この資料のうち、ここでは7・8月の滞在者のみを対象とした。というのは、この2ヶ月が避暑としての利用が多いからである。なお、滞在者を数えるのに夫妻で一部屋というのが存在したが、定かでないものも存在するため、ひとつの欄の名前を一名として集計した。

まず、1892（明治25）年7・8月の富士屋ホテルの顧客圏を示したのが、第2図である。それによると顧客圏はオーストラリアのクイーンズランドとチリのバルバラインを除き、明確に日本国内、中国・東南アジア、ヨーロッパ、アメリカの4地域に区分される。日本からの来訪者は、大阪の一人を除き、横浜89人、東京30人を中心に神戸8人と発展していた外国人居留地に限られていた。しかし、この在日外国人の中には横浜、神戸の居留地の知人を尋ね、一緒に宮ノ下を訪れた外国人旅行者も含まれていると思われる。というのは宿泊名簿の「どこからきたか」という書式に対し、様々な書き方が存在するからである。

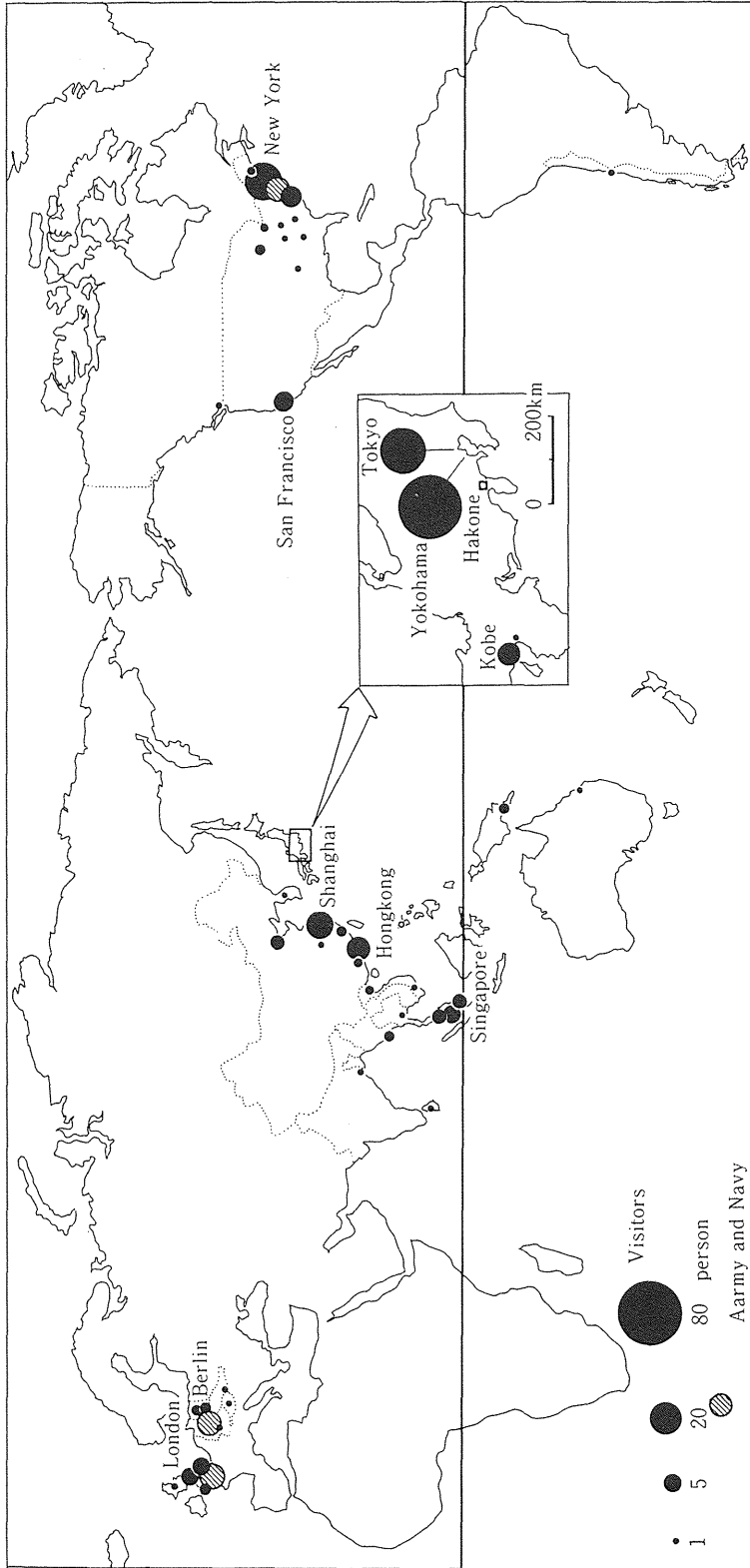
中国・東南アジアからの顧客は、ほとんどがヨーロッパ列強の植民地乃至は半植民地からであったことが特徴的である。中国では香港の租借地10人は別としても、上海15人、広東2人、南京1人などの租界（foreign settlement）からの来訪者が目立つ。中国（China）とだけ記載されているものは、後の宿泊者名簿等を配慮し、北京・天津にした。また、東南アジアではハノイ、サイゴン、シンガポール3人、海峡植民地（Strait Settlements）5人、ペナン4人、ビルマ3人、インド、ジャワなどヨーロッパの植民地からの人々が多かった。当然、これらの植民地には高原保養地が発達していたのだから、その情報を日本在住の友人に伝えたと思われる。特に富士屋ホテルは、宿泊地であるとともに社交場であり、インド、東南アジア、中国の情報も飛びかった情報交換の場であったと思われる。

ヨーロッパからの来訪者ではイギリスとドイツが目立つ。イギリスではロンドン6人を中心としたイングランド6人が多く、ウエールズ2人、スコットランド1人と続く。ドイツではベルリン2人、ドレスデン2人、フランクフルト1人であるが、ライプチヒに所属する軍人13人が注目される。なお、イギリス海軍軍人も18人を占めていた。

アメリカではアメリカ合衆国が最大の顧客であった。すなわち、ニューヨーク27人とサンフランシスコ6人の東海岸と西海岸を中心に、ボストン2人、シカゴ2人、シンシナティ2人、アトランタ1人など合衆国全土にわたっているのが特徴であろう。また、アメリカの軍人7人はフィラデルフィアを拠点にしていた。

このような顧客圏は、基本的には居留地の経済・文化活動の力関係を反映したものであろう。すなわち、イギリスは外交ばかりでなく、銀行や商館を通じて日本経済に深く入り込み、植民地を通じて東南アジアに強い影響力を有していた。一方、アメリカ合衆国の経済的影響はイギリスに及ばなかったとしても、アメリカ人は教会、学校教育（いわゆるミッションスクール）等の文化活動にも力を注いでいた。

では宮ノ下のこのような来訪者は、どのように変わるのであろうか。第1表は、1892年の宿泊者名簿を1895、1899、1910年と比較し、来訪者の地域的変化の様相を示したものである。なお、整理の都合上、数が少ない都市は一括して国に編入した。第1表によると、1895、1899年および1910年になっても、前述の基本構造は変わっていないが、上海、香港などが増加傾向を有するのに対し、アモイ、広東、ハノイ、海峡植民地からの旅行者は減少している。また、イギリス海軍、アメリカ海軍軍人も減少する傾向にあった。また、1910年になると、居留地以外の来訪者が増えている。これは、内地雑居が認められた結果とみることができる。



第2図 宮ノ下富士屋ホテルの顧客圏（1892年）
 富士屋ホテルの宿泊者登録名簿（Register Book）の7・8月分の集計による

第1表 居住地別富士屋ホテル夏季宿泊者数の変化

地域	都市・国	1892	1895	1899*	1910	地域	都市・国	1892	1895	1899*	1910
Japan	Yokohama	89	69	74	100	Europe	London	6	5	6	6
	Tokyo	30	19	18	31		England	6	15	20	15
	Kobe	8	10	6	5		H.M.S.	18	6	4	-
	Other Japan	1	1	1	8		France	1	3	1	3
Korea	Korea	1	-	-	1	Germany	18	12	4	15	
China	Shanghai	15	25	35	54	Austria	2	2	16	-	
	Hongkong	10	17	13	14	Italia	0	4	-	1	
	Other China	10	7	8	19	Holland	-	-	-	6	
Southeast Asia	Singapore	3	1	1	-	America	Canada	1	-	1	1
Asia	Indonesia	1	3	2	-	U.S.A.	New York	27	11	13	5
	Malaysia	9	1	-	-	Eastern	6	3	4	16	
	Burma	3	1	2	-	Central	12	15	7	12	
	Others	4	-	1	1	Western	6	9	5	20	
Pacific	Manila	1	-	4	9	U.S.Navy	7	10	8	1	
	Oceania	1	3	3	2	Others	5	4	9	6	
	Others	3	1	-	-	Un-known	4	12	4	12	
India	India	1	4	3	9						
Russia	Russia	-	6	5	1	Total		308	279	278	373

* 8月22-31日資料欠。 富士屋ホテルの宿泊者登録名簿（Register Bookの1992, 1995, 1999, 1910年7・8月分）の集計による

つぎに、1895（明治28）年の7、8月の訪問客の居住地別滞在日数を示したのが、第2表である。それによると、宿泊者の滞在日数は、短期（2・3日程度）、中期（1週間程度）、長期（2週間以上）に区分されよう。もちろん、短期滞在が63.8%と主流であるが、中期滞在が25.8%、長期滞在も10.4%に上る。ここに宮ノ下が避暑地として機能した性格が表れているといえよう。長期滞在者を地域的にみると横浜、神戸からの外国人、および上海、香港など中国からの来訪者が多かった、国籍で見るとイギリス人、ドイツ人が多く、最長の滞在者は2ヶ月に及んだ。

この1895年にはベルギー公使ダヌタン夫妻が宿泊していた。すなわち、彼らは7月11日「私たち箱根の宮の下に滞在中である。ロシアのマカロフ提督とその幕僚がホテルに泊まっている。・・・マカロフ提督とロシアの将校たちは今日(7月28日)出発したが、彼らがいなくなったことは誠に残念である。・・・山のなかでの二ヵ月以上に及ぶ滞在と休養を終えて、宮ノ下を発った(9月15日)」と長期滞在していた。この滞在期間、彼らは五度目の富士登山をしたチェンバレン教授やアーネスト・サトウ、ロシア公使等と会っている（ダヌタン著長岡訳、1992, 93-96）。このことは宮ノ下の富士屋ホテルがリゾートホテルとして機能し社交場の役割をしていたことを示すものであろう。

一方、アメリカ合衆国やヨーロッパからの来訪者は短期間の者が多かった。これは軍人が含まれていたことが、一因であろう、しかし、これら滞在者のなかには旅行社の募集した世界旅行のバック旅行者が含まれていたとも考えられる。というのは、バック旅行は1855年のパリ万国博覧会を機にクック社により開始された（中川、1985）というので、40年後にはその波が当然日本に及んでいたと考え

第2表 宮ノ下夏季宿泊者の居住地別滞在日数(1995年)

居住地		1-2	3-4	5-6	7-10	11-14	15-29	30--	計
Japan	Yokohama	35	12	7	6	2	4	4	70
	Tokyo	11	3	-	-	-	-	1	15
	Kobe	2	5	-	2	-	2	1	12
	Others	3	-	-	-	-	-	-	3
China	Shanghai	9	3	1	8	1	6	-	28
	Hongkong	3	-	1	9	1	3	1	18
	Others	2	2	1	-	-	1	2	8
Southeast Asia	Singapore	1	1	-	-	-	-	-	2
Asia	Indonesia	3	-	-	-	-	-	-	3
	Burma	-	1	-	-	-	-	-	1
	India	2	-	-	-	-	1	-	3
Australia	Australia	-	-	3	-	-	-	-	3
Russia	Russia	-	-	2	4	1	-	-	8
Europe	Britain	13	12	4	2	-	1	1	33
	France	1	2	-	-	-	-	-	3
	Germany	4	5	2	-	-	-	-	11
	Italia	1	2	2	-	-	1	-	5
	Sweden	-	-	-	-	-	1	-	1
U.S.A.	Eastern	10	6	1	3	-	-	-	20
	Central	2	1	4	2	-	-	-	9
	Western	5	4	1	-	1	-	-	11
	U.S.Navy	8	3	-	-	-	-	-	11
Un-known	7	-	-	2	1	-	-	10	
Total		122	62	29	38	7	20	10	288

富士屋ホテルの宿泊者登録名簿の7・8月分の集計による

られるからである⁹⁾、このような事情を反映し、富士屋ホテルの宿泊者は時代の経過とともに長期滞在型から短期滞在型へ移行し、長期滞在型の宿泊は箱根宿などの芦ノ湖畔に移ったと思われる。

ともあれ、軽井沢への避暑が始まったのが1886年で、万平ホテル、軽井沢ホテルが開業したのがそれぞれ1894、1901年であるから、富士屋ホテルを中心とした宮ノ下は、前述のように早くから大量の外国人を世界中から魅きつけてきた国際的避暑地・観光地であったことを意味するものであろう。

Ⅲ-3 外国人別荘の建築と宮ノ下

1) 首都圏の外国人別荘と宮ノ下

ここで外務省の資料「外国人ニシテ日本人ノ名義ヲ以テ土地家屋ヲ所有並ニ会社ヲ設ケ商業ヲ営ムモノノ調査」(1892)により、首都圏における1892(明治25)年当時の別荘地の分布をみよう。この資料には、家屋土地所在地、地坪数、地価、名義人、所有外国人、棟数、所有ノ目的、摘要の8項目

が記載されている。しかし、「報告ナシ」の県が14にのぼる上、府県によって記載内容の不統一が存在する、また、記載もれの箇所も存在するため、坪数で一律に比較することは困難である。たとえば、外国人の「所有ノ目的」を学校、教会をはじめ住居、畑、原野、林、貸地などを含めた記載もあれば、宅地のみのももある。しかも、軽井沢のように地目が山林や原野のままで別荘にしている例も存在すると考えられる。

したがって、どのように別荘地を集計するかが問題となる。関東地方およびその近傍で別荘の記載があるのは、神奈川、長野両県のみで、静岡県は「布教および避暑」の名目となっている。つまり、群馬県や栃木県には「所有ノ目的」が住宅となっているものの、伊香保、草津、日光のものは、当然別荘と考えられる。また、畑、山林、原野等の土地のみの記載も、一人でその全てを所有している事例があるので別荘とは考えにくい。そこで、主観的で不完全ではあるが、件数（軽井沢・御殿場などでは一人で2ヶ所以上もっている）のみの記載が妥当となろう。このようにして、教会や学校を含め外国人の所有している土地を市町村別に関東地方を中心とした別荘地の分布を示したのが、第3図である¹⁰⁾。しかし、残念なことには埼玉、千葉、茨城の資料が欠けている。しかし、別荘地の大きな傾向は把握しうるであろう。

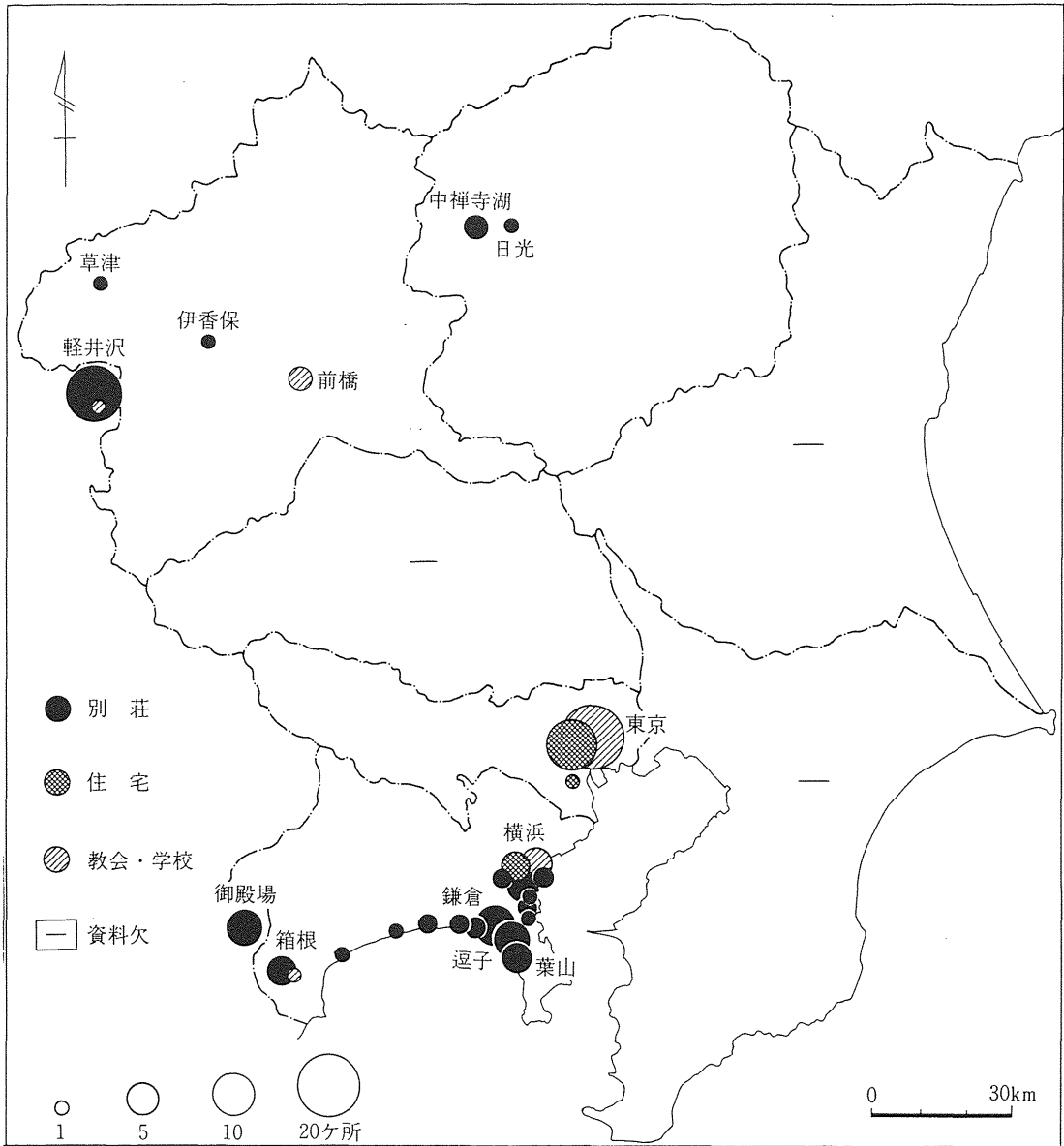
それによると教会、学校は東京市の麹町、芝、京橋、本郷区などの東京市および横浜市に集中していることがわかる。東京や横浜の外国人住宅は妾宅である場合が多いが、横浜近郊の久良岐郡の根岸等には妾宅も別荘と記載されている（外国人は日本人妻や子供の将来を考え、一種の不動産を残す目的で宅地等を所有していたと資料から読み取れる）。

第3図によれば、外国人の別荘地は海岸と高原に区分される。海岸部では横浜の南の東京湾に面する本牧、根岸、屏風が浦、金沢方面が一つのグループであり、もう一つは、葉山、逗子、鎌倉、茅が崎の南湖、大磯、酒匂へ続く海浜別荘地である。ここは、本来の外国人遊歩地区内であったので、高原の避暑地より早くから発達したと考えられる。

一方、高原の別荘地としては箱根と御殿場、および内陸の日光、伊香保、草津、軽井沢が挙げられる。箱根と御殿場は富士登山やその風光名眉を目的にしたものであろうが、これまでみてきたように、宮ノ下と後述する箱根が最も早くから発展し、御殿場の東山（旧富士岡神山）は1889年御殿場回りの東海道線の開通と同時に開発されたものである。また、内陸では伊香保、日光が早く、草津、軽井沢がそれに続くものであろう。しかし、別荘地の規模からみると軽井沢、箱根、御殿場、日光の順であった。軽井沢に教会が存在し、御殿場に病院が設立されるのは、相対的に広大な平坦地が存在したためであろう。また、この拡大の余地があることが将来の発展を約束することになったと考えられる。

2) 宮ノ下の外国人別荘

前述の外務省資料によれば、1892当時、東大医学部の教授ベルツは宮城野村木賀に山口仙之助名義で133坪の宅地に別荘を持ち、林564坪も付帯していたと記載されている。これが、いわゆる「ミハラシダイ」の別荘であろう。ベルツ日記によれば、1889（明治22）年7月12日から8月8日まで「ミハラシ」に滞在し、「箱根山中にある自分のささやかな山荘『ミハラシ』は全く『よい眺め』というその名に背かない。実際、全山中で最も景色のよい場所である」（ベルツ著菅沼訳、1979、上、147）と



第3図 首都圏における外国人の別荘分布（1892年）
 外務省資料（1892）による

記している。しかし、明治27年箱根の富士屋ホテルで家族と夏季休暇を過ごした感想を「宮ノ下を去るのは残念だ。いまだかつて、日本でこんな楽しい夏を過ごしたことはない。しかも、妻や子供たちと一緒に、しあわせな日を送ったのだ。・・・天気の良い、からっとした夏、よいホテル、愉快的交際仲間」（同上、169-170）とのべている。また、「教授は木賀の見晴らしの景を非常に愛され、明治十五年頃には既に別荘を設けられていた」（富士屋ホテル株式会社、1958、13）とあるので、ベルツの別荘は堂ヶ島にあった平松別荘と並んで早い時期の別荘といえよう¹¹⁾。

また、湯本村塔ノ澤に露人ニコラスロスホーフが2,130坪の宅地に別荘を佐藤秀六の名義で持ち、別荘には畑563坪、林1,513坪が付帯していたことが分かる。これは「1879年頃ウラジミル・ソコロフスキー司祭が建てた日本ハリストス正教会の避暑施設であったが、・・・1902年頃には取りこわされた」（小笠原、1990、77）という。地元でロシア避暑館とよばれた施設の場所は、現在ベゴニア園となっている。一方、英人ジョンウイリアムホールは入婿して星野芳春という婦人名義で温泉村底倉に旅館を経営していた。これは開化亭ホテルを指し、彼は1895（明治28）年精進湖畔に近代のホテルを建てた。さらに、前記資料によれば、ポルトガル人ホンセカは瀬戸山（木賀）に妾宅を構えていたと記載されている。

3）日本人の別荘

宮ノ下への外国人の避暑滞在とともに、日本人のなかにも別荘が設立されることになる。その代表的なものは、1886年頃に塔の沢に設置された平松別荘であろう。東京の牡蛎殻町の商人平松甚四郎が温泉を買収して別荘にしたものであるという。

しかし、日本人へのより大きな影響を与えたものは、1896（明治29）年の御用邸の設置であろう。後述の箱根離宮の設置より遅れたが、この宮ノ下御用邸を明治天皇は利用することはなかった。しかし、国賓の接待や後の大正天皇や皇族方によって利用された。この御用邸は1901（明治34）年に小田原御用邸の設置にともなって廃止され、1934年高松の宮別邸となった。しかしながら、この別邸も1946年、富士屋ホテルに買収され、富士屋ホテル菊華荘となって現在に至っている。

日本人の別荘が建設されだしたのは、大正期といわれている。すなわち、小湧谷地区には「大正期になると、三井家のうち三家（北家、松阪家、新町家）のほか、赤星鉄馬、薩摩治兵衛等がこの傾斜地の森の中に別荘を構えるようになった。また、現在の国道1号線をはさんで反対側には、三井家のうち伊皿子三井家の別荘や藤田別荘も建てられ、この辺は別荘地としても知られるようになった」（箱根町郷土資料館、1987）という。

ついでに芦ノ湖畔の別荘について触れると、最初の外国人別荘は、ドイツ人パール・シュミットにより箱根宿に建てられたもので、1906（明治39）年のことであったという（児島、1991）。しかし、前述の外務省資料によれば、独人キヨソネが成瀬常一の名義で元箱根村に別荘を構えていたと記載されている。キヨソネ氏は本当はイタリア人であり、1879（明治12）年から大蔵省印刷局雇教師であったが、1891年に満期解雇となった。しかし、引き続き宮内省に雇い入れられたという。1898（明治31）年11月11日に日本で死亡（葬儀の友人代表に成瀬常一の名前がみえ、モールも彼との交流を書いている）。また、シュミット氏はライカカメラで有名なライツ社の日本総代理店「シュミット商会」の創立経営者であった。なお、日本人の別荘としては元箱根に岩崎小弥太によって1902（明治35）建てられたものであるという。

かくて、「上り下り八里の難路、関所止めや雲助の跳梁に、旅するものの鬼門とされていた箱根は、今や懐かしい天下の名勝、生存競争に疲れた紳士の保養地、優しい都鄙の憧憬の里、歓楽郷と変化した。離宮・御用邸の設置後は、これに刺激された名士紳商、続々別荘を建てるばかりでなく」（足柄下郡教育会編、1929、263）、ホテルなども建設されたという。

Ⅳ 滞在型避暑地箱根

Ⅳ-1 幕末の箱根宿

箱根は周知のように関所に付随した東海道の宿場町であった。しかも、小田原藩と三島宿の人たち、それぞれ50戸によって作られた人工的な町である。したがって、箱根宿は小田原町、三島町に加え、木地師の町であった芦川町および新しく加わった新町からなっていた。しかも、一九世紀の中頃の小田原町には4軒の本陣があり、三島町には本陣2軒、脇本陣1軒あり、專業旅籠はそれぞれ20、13軒存在した。さらに籠掻き渡世等を含めると、箱根宿は全体で160軒の町並であった。

箱根の関所を最初に紹介した西洋人はケンペルであろう。彼は1691年3月11日に江戸参府の途上に箱根の通過した。「約一〇町すなわち一時間後に峠に着いたが、一般には山の名をとって箱根と呼ばれている。われわれは今日の旅程の半ばを終えて、ここで昼食をとった。地形やその他のいろいろの状況、特にすぐ近くにある山の湖は、この土地に大へん特色をもたせている。・・・村そのものは二五〇戸の貧しい家々から成り、大部分は長く弓なりに曲がった町筋をなして、高い山地の上の、いわば空中にあるような上述の湖の東南岸にある。・・・ここにはハエも蚊もないから、夏は静養していてもこれらに妨げられることはないが、冬ここに滞在するのは全く快適でない」(ケンペル著 斎藤訳、1977、161-162)として、夏のリゾートの可能性をほのめかとしている。

1857(安政4)年12月26日下田滞在のアメリカ領事ハリス一行が箱根の関所を通った。ヒュースケン日記によるとハリス一行は三島から「四里ほど登って山頂に達し、半里下って、三百軒ほど家のある箱根村についた。この村の宿に着くと、小さな湖に面する部屋に通された。湖は深い紺青色をしており、・・・周囲は険しい山で、樹木が繁茂し、その背後に富士ヤマがみえる」(ヒュースケン著 青木訳、1989、193)と。

一方、オールコックが外交官特権を活用して1860年(万延元年、9月)に富士登山への途中、箱根を通った印象は、「小田原から三島へゆく道は、箱根の峠をとおっている。・・・道はほとんどたてつづけに上り坂で、徐々にしか前進することができず、仲々骨の折れる仕事である。だが、景色はからだの疲労をつぐなってあまりあるものであった。スイスを旅行した者にはオーベルラントのある部分、とくにローテルブリュンネンへの下り坂を思い出させる個所が多かった。・・・たとえ、その景色が崇高さの点でアルプスにとってもおよばぬとしても、その代わりに植物の種類の多さと豊富さでははるかにアルプスをしのいでいる。・・・カシヤカエデやブナやハンノキやクリなどもみなここにあり、ゆたかな秋の色合いにつつまれていた」(オールコック著 山口訳、1962、中、166-167)というように江戸や横浜の監視つきの生活を離れた楽しい気分が溢れていた。なお、一行は箱根の湖に面した本陣に宿泊した。

サトウもワグマンと1863年に箱根を三島から通過している。すなわち、「翌朝は六時半に出発した。箱根の峠にかかったが、その道はローマの公会場を起点とするアップピア道路ともいうように大きな石で舗装されている。松や杉の大木の立派な並木道である。・・・三時間かかって箱根に着いた。箱根は、峻険な草深い小山に囲まれている湖水の南縁の、小さな山村である」(サトウ著 坂田訳、1960、289)

と述べている。

しかし、明治維新による駅通制度（参勤交替）の廃止（明治2年）は中山道の軽井沢同様、耕地のほとんどない宿場町箱根に大きな影響を与えた。通過交通量の減少が、旅館、問屋場、人夫の需要を減少させた結果、人口流失が表れはじめ、利用されない民家も出てきた。1889（明治22）年の東海道線の開通が大きな打撃を与え、1902年には箱根町の戸数は90戸になってしまった。

Ⅳ-2 外国人の眼からみた滞在型避暑地箱根

1) 柏屋への宿泊

a) 1868（明治元）年：イギリス公使ハリ－・パークス

これらの民家のいわば廃屋を再活用したのが、外国人の滞在であり、箱根の危機を救ったのが、外国人の避暑慣習であろう。すなわち、早くも1868（明治1）年の夏のはじめにハリ－・パークス夫妻は、当時見習通訳生で後年上海や横浜の領事裁判所首席判事になったH.S. ウィルキンソン、陸軍士官二名、モリソンその他数名とともに、宮ノ下と箱根を訪れた。モリソンによれば、「われわれには公使館付騎馬護衛隊の士官二名が同行した。・・・小田原の町で一泊し、翌朝、箱根にいたる山道を歩いて登った。途中、畑という村に立ち寄って昼食をとったが、・・・箱根では柏屋に泊まった。大きなお茶屋であった。・・・サー・ハリ－は夏の数か月間、事実上そこに公使館を移した」（コータツィ著中須賀訳、1988、343-344）という。このことは箱根宿が高原保養地としてイギリス公使パークスによって発見されたことを意味するものであろう。つまり、夏に公使館を高原に移すということは、夏の首都（summer capital）としてのシムラヤコダイカナルなどの高原保養地が成立していたイギリスの植民地インドの影響がみとれる。

b) 1871（明治4）年：外交官アーネスト・サトウとヒューブナー

3年後の1871年にアーネストサトウは、英国代理公使アダムスとオーストリア外交官ヒューブナー男爵と一緒に箱根に旅行しているが、その際もこの柏屋（駒本陣）に宿泊した（それは後年サトウが「八時半に本陣の柏屋に到着し、ディキンズ夫妻に手篤く迎え入れられた。そこは六年前にアダムズ、ヒューブナー男爵それに私が宿泊したところだ」と記録していることから判明した）。サトウ一行は8月22日に東京を出発した彼らは途中藤沢の亀屋と畑宿の茗荷屋に宿泊して25日に箱根に到着している。すなわち「二月に火事で消失した黒こげの家屋の焼跡の前を通過し、箱根の村の中心である広い通りに出た。ここで一人の宿役人に案内され巨摩佐五衛門〔駒佐五兵衛〕などが経営する六軒ある本陣の一つに向かい、十時二十分に私たちの部屋に落ち着いた。アダムスと私はすぐに宿の庭にある階段の裾に打ち寄せる湖で水を浴びた」（サトウ著庄田訳、1992、2、155）という。一行は箱根神社や箱根用水の探訪、周辺の山々に登山や散策に出掛けている。ヒューブナーは芦ノ湖に船を浮かべて「スコットランド北部とよく似ている」のに驚き、また、滞在中「一人のアメリカ人宣教師、B博士が私に会いに来た」（ヒューブナー著市川・松本訳、1988、60）と書いている。

このことは、箱根に滞在していたのが彼らばかりではなかったことを意味するものであろう。事実、元本陣の鎌倉屋石打旅館には外国人来訪者雑記帳（foreign visitors book）¹²⁾があり、1871年9月1

日に宮ノ下から峠を越えてやってきた最初の外国人が記されており、同年の9月30日、2人のスコットランド人マッカヒーとシーウェルがここに滞在している間、「わたしたちは最上のもてなしを受けた。料金は格安で、外国人に不快な思いをさせないように、宿の人々のふとした仕草に暖かいもてなしを感ずる」(Williams, 1958, 153)と書いていたという。つまり、箱根は当初「暖かいもてなしと宿の主人の親切、および格安の料金」が魅力であった。

c) 1877 (明治10)年：イギリス外交官アーネスト・サトウ

1877年ディキンズと富士登山する際に、サトウはチンと執事の遠山と伴に柏屋に宿泊しているが、東京から箱根に7月25日の一日で到着している。国府津までの鉄道の開通等で東京から箱根へのアクセシビリティが極めてよくなったことが伺える。翌日は台風による暴風で外出は出来なかった。柏屋には英国公使館員のマウンジーも滞在していたが、同様に外出していない。サトウはその翌日、ディキンズと箱根神社に参拝しているが、「寺社は見るも無残な状態で放置されている。仏教関係の部分は全く荒れるがままに捨て置かれ、丈高い雑草の藪や幼木が葺屋根を覆い床は剥がされ持ち去られていた・・・」(サトウ著庄田訳, 1992, 2, 106)と廃仏毀釈の惨状も伝えている。

d) 1882 (明治15)年：パークス嬢

一方、1882年パークス嬢から叔母のブルーマー女史に出した8月2日付けの手紙には「今朝八時ごろ箱根の私たちの小さな山の家に着きました。ここはとても素晴らしいところで、ただヴェランダに腰を下ろし、窓から見える美しい景色を眺めるだけで、ほんとうに楽しい。・・・四方を美しい緑の山々に囲まれ、その向うに富士山がそびえ、雪をいただいた姿は壮大です。この家は日本風の建物で、大そうきれいです」。また8月14日付けでは「ここに来て父はせかせかと働いています。どうしてもんびりできないのです。休息できたらよいと願っているのですが、そんな性質ではありませんから、ここへ来て、丘を駆け上がったたり、かけ下りたりしていないときは、きまって働いているのです。楽しみのためにボートに乗って漕ぎまわるとか、腰をおろしてぼんやり景色を眺めるとかということが、父には理解できぬのです」(ディキンズ著高梨訳, 1992, 331-332)とパークス公使の様子も描いている。サトウはこの年の8月23日に箱根の山木屋に着き、パークス一行と合流した。8月25日「パークスの娘さんたちとウィルキンソン、レイヤードとともに船で湖の端まで行き、水路のすぐ上にある山に登る。・・・夕食のあと月明かり中で舟遊びをした」というように、箱根の長期滞在者の存在と芦ノ湖のボート遊びが箱根の魅力であったといえよう。そして、サトウは8月2日にはここからパークスと娘たち、ジェムス大尉、ディクソン青年と彼の姉の8人で富士登山に出かけている(サトウ著庄田訳, 1992, 2, 125-134)。このサトウの山木屋という記載は、柏屋が山木屋に変わったことを意味するものであろう。というのは、柏屋は芦ノ湯に移転しているため、本来山側に位置していた旅籠である山木屋が従来の柏屋を経営していたと考えられる。それは『日本旅行案内』の第3版(1891年)に山木屋が湖岸に面しているという記載とも一致する。

2) 滞在型宿泊地箱根

a) 1876 (明治9)年：香港からの旅行者

ウィリアムズは前述の鎌倉屋石内旅館の宿泊者名簿から1876年の8・9月に奥さんと子供3人を連

れて5週間滞在した香港からの旅行者の例を挙げている。かれらは「非常に快適で、宿の主人と奥様は常に親切で正直であった」と記している (Williams, 1958, 154)。

b) 1878 (明治11) 年：地理学者クライトナー

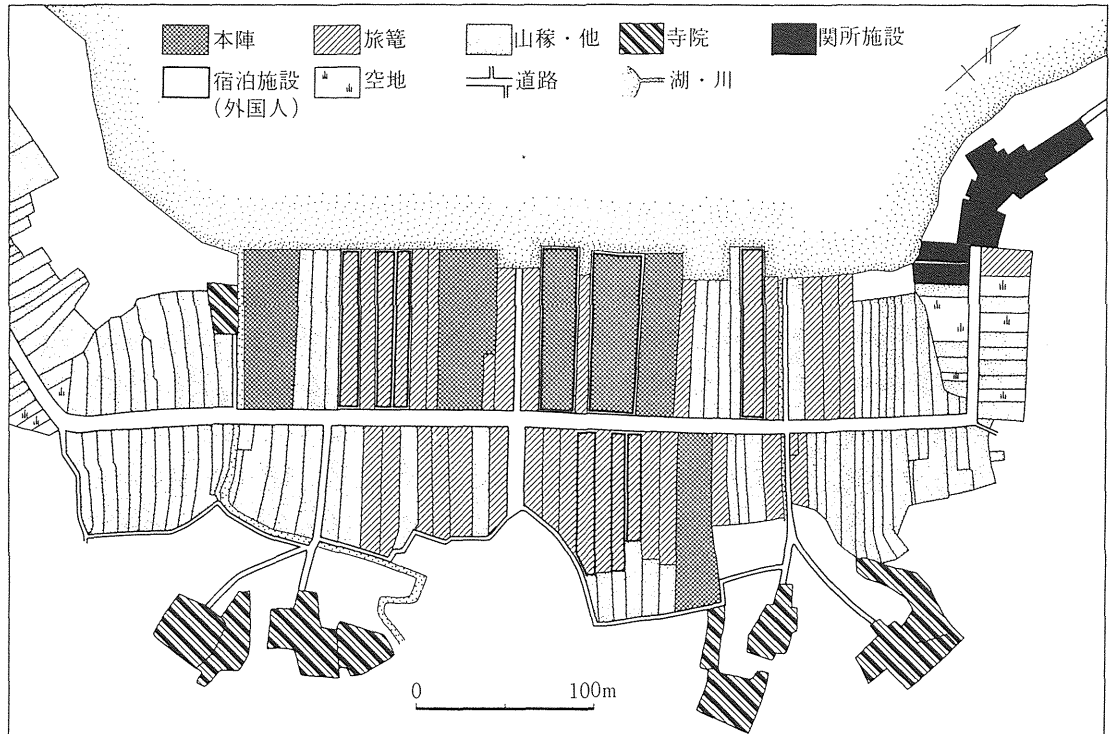
一方、1878年の7月にここを旅行したオーストリア・ハンガリー帝国のクライトナーは、「横浜や東京に住むヨーロッパ人には、箱根は人気のある避暑地である。箱根に着いて聞いた話では、およそ一〇人のヨーロッパ人が避暑に来て、和風の茶屋とか民家に投宿した由である。・・・箱根はほんの小さな村で、街道周辺に九〇軒ほどの木造家屋がある。・・・箱根の住民の生活は貧しい。彼らは湖で漁をしたり、鶏を飼ったりのほか、ヨーロッパ人の家に雇われて走り使いをしたり、食料品を横浜に運び出したり横浜から運び込んだりして暮らしている。イギリス公使館の書記官で、箱根に夏の別荘を構えているマウンズィー氏が東京から来ていて、わたしたちは彼の別荘で実に楽しく快適な数時間を過ごすことができた」(クライトナー大林監修, 1992, 1, 269-270)と書いている。この記述は、前述のサトウの記録(1982年)とも符合し、マウンズィー氏は柏屋に泊まっていたと思われる。したがって、欧米人は箱根で民家を借り上げたものを別荘と呼んでいたといえる。

c) : 1888 (明治21) 年：宮内庁式武官モール

宮内庁の式武官であったドイツ貴族のモールは1887年9月の御用邸出張に際し箱根のはふやに泊まっている。彼によるとフォン・ホルレーベン駐日公使がベルツの別荘を借りて箱根宮ノ下に滞在していたという。また、彼は1888年1月、「妻が風邪をひいたので、わたしたちは数日を箱根の宮ノ下で過ごすことにした。わたしたちは一月二十一日、同地に着き、澄みきった暖かい空気とすばらしい鉱泉浴をたのしんだ。その頃はクリスマスと正月の日々を宮ノ下で過ごすことが、多くの人々のならわしとなっていた」(モール著金森訳, 1988, 133)と冬でも箱根に行くことが流行っていた様相を描写している。

しかも、「わたしたちはほんとうに素晴らしい天候に恵まれた時には、峠を越えて箱根湖畔に赴き、数百年の樹令をもつ杉並木を通り、苔むす石段を上り、絵のように美しい神社にたどりついた。今や雪化粧した富士山は、湖を取り巻く山々の上に、はっきりとその姿を表した。まことに見事な光景であった。わたしたちはこの年の夏休みを箱根で過ごすため、湖畔の箱根村で日本家屋を借りることに決めた」(同上, 183)と箱根を気に入り、バカンスをとる経緯についても触れている。

そして翌年「七月十一日に二カ月に及ぶ夏休みとそれに伴う役所の閉鎖が始まったので、わたしは七月十二日、家族がすでに先に出かけ、生活している箱根に向かった。同月十五日、休火山と信じられていた東北地方の磐梯山が爆発した。・・・この湖[芦ノ湖]はアクセン湖あるいはコッヘル湖、ヴァルヒュン湖などチロルやバイエルン地方にある山の湖とよく似ている。・・・このあたりは平穩そのもので、夏の保養地としては最適である。それというのも、ここは標高約1000メートル、蚊もおらず、ヨーロッパ高地の気候を想起させるからである。・・・わたしたちは、このすばらしい土地で六週間を過ごした。家族はほとんどその二倍の日数をそこで送った。わたしたちは、山や森の中のすばらしい散歩や、毎日のように行った湖中水泳のおかげで常に爽快な気分になり、高い山々、快いようなおいのある谷間、あるいははるか彼方の青い海を眺めて常に新鮮なよろこびを味わった」(同上,



第4図 明治期の箱根宿の町割りと外国人滞在施設
町割りは中村(1979)による

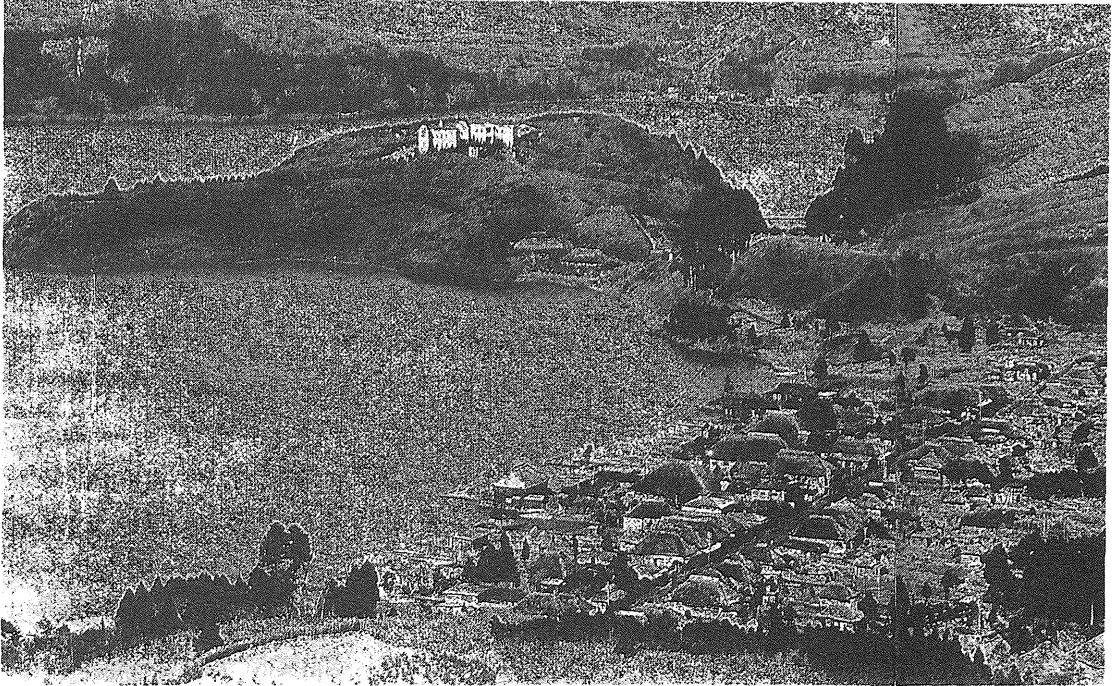
162-165)と避暑地箱根での休暇を満喫している。その上、「わたしの別荘の近くの似たような日本家屋に、わたしたちときわめて親しいイギリスのル・ポア・トレンチ代理大使が、その頃、横浜在住のドゥス夫妻とともに暮らしていたが、船遊びをともにするなど、わたしたち家族と一緒に、ここでの生活をたのしんだ」(同上, 167)と彼が例外的な避暑客でなかったことも記している。

d) : 1904 (明治37)年: ベルギー公使夫人ダヌタン

8月21日「鎌倉の七里が浜の家を出発して、サー・ハイラム・ウィルキンソンの家へ泊るために箱根に向かった。彼は上海の首席判事で、箱根の湖に面した彼の美しい日本家屋でいま休暇を過ごしている。・・・彼の家で大きなハウスパーティーが開かれており、客としてきていたのは上海の総領事サー・ペラム・ウォーレンのチャーミングな三人の令嬢と、ロイド・トーマス嬢、横浜の領事ホール氏とその令嬢、英国軍艦シーティス号のウィルキンソン海軍大佐、マスターズという名の若く元気のよい海軍小尉候補生であった。私たちは親切で優しいこの家の主人から温かい歓迎を受けた」(ダヌタン・長岡訳, 1992, 330)と中国派遣の高級官僚が箱根に避暑に来ていた様子を記している。集まった友人たちはウィルキンソン判事の勤続40周年を祝うものであったが、箱根が国際的避暑地であったことを示す一例といえよう。

e) 1904 (明治37)年: 宮内省医師ベルツ

宮内省の医師ベルツは8月「十六日の夜、妻を伴いケスラー氏と共に箱根に行ったが、同地で妻は、



第5図 1887（明治20）年頃の箱根離宮と箱根宿の景観

1885年に避暑と避病のために塔ヶ島に建設された箱根離宮が目立つ。手前の箱根宿は宿場の面影を残しながらも、外国人の滞在で変化を見せ始めている。芦ノ湖岸に突出した避暑的民家を有するのが、本陣鎌倉屋（石打旅館）、奥へ2つの大きな建物が本陣柏屋と川田。その奥で湖岸に2階屋が異人館と呼ばれたはふや。箱根の関所は取り壊されてない。小田原市立図書館（高野 肇所蔵）提供。

氏の家庭にあって、一カ月を過ごすことになっている」（ベルツ著菅沼訳，1979，下，149）と家族の長期滞在の予定を伝えるとともに、日露戦争の影響で「箱根は、傷病兵であふれている。ここに転地させられているのは、主として脚気患者であるが、負傷回復期のものもいる。東京鎮台の兵士で、たいていは予備兵や後備兵である」（同上，下，151）と記し、箱根がリハビリに活用されていることを明らかにするとともに、脚気の原因が食生活にあるのではないかと推定している。また、ベルツは同年9月草津への途中、軽井沢を訪れ軽井沢がアングロ・サクソン系の新教伝道者¹³⁾によって避暑地になってきたこと、および「当地には、回復期の傷病兵が、千名ばかり滞在している」（同上，下，175）と箱根との共通性に触れている。

なお、箱根への滞在者数は気候や社会情勢によって変化したようだ。例えば、前述のベルツは同年6月20日「自分の雇った葦の湯の強力は、同地や箱根がいかにも不景気であるかを、下山の際、物語った。一昨年の夏は、非常に雨が多かったのでお客は不平だった。ついで昨年の夏は、非常な日照りであったにもかかわらず、お客がなかった。そして本年は、戦争と来ている」（同上，下，105）と。

3）箱根宿の町並景観の変化

第4図は箱根の町割り（中村静夫編 箱根宿歴史地図参照）と前述の記載に表れた外国人宿泊旅館

を示したものである。この地図には箱根宿の三島町、小田原町、新町のほぼ全域が含まれるが、前記柏屋は、6軒あった箱根宿本陣の1つ（柏屋駒佐五兵衛の家）で、湖岸に面する箱根宿のほぼ中央部に位置していた。通称「駒本陣」とよばれていた柏屋に加え、「鎌倉屋」石内などの本陣からは、芦ノ湖の湖面の端の山脈の上にて富士山の美しい景色がみられた。外国人が長期滞在に指定したのは、このような素晴らしい景色のみられる、湖岸に面した民家であったといえよう。

箱根宿は本陣の他に旅籠34軒存在した。他の民家も宿泊可能であったが、殆ど山稼ぎとの兼業であった。したがって、明治に入っても外国人が宿泊できたのは本陣と旅籠であったとみることができよう。しかし、前述の外国人の記録には宿泊旅館名や滞在民家の屋号を記しているのが少ない。したがって、第4図には判明したものだけを記しておいた。それによると、外国人の好む水辺の湖岸の方が多かったという一般的傾向が伺える。

ここで宿泊施設の間取りをみると、本陣柏屋の場合、間口14間、敷地710坪、建坪218坪、客用部屋数16間（他に湯殿2、雪隠4）も存在した（中村、1979、箱根宿歴史地図参照）。これは旅籠の4倍近くあり、鎌倉屋などの本陣に共通するものであったろう。つまり、外国人の滞在がなかったら、無用の長物となる施設であったといえよう。したがって、避暑としての外国人の滞在は、箱根宿の人々にとっては正に時宜に叶った活用といえた。では外国人の滞在によって箱根宿の景観はどのように変化したのであろうか。

1880（明治13）年に箱根の塔ヶ島に「箱根離宮」ができたのは、このような西洋人の避暑慣行に影響されたものであろう。すなわち、「箱根塔ヶ島は湖水に斗出し、風光明媚にして空气清新、最も夏季の居住に適す、宮内卿伯爵伊藤博文侍医等の議を心酌し、その地に離宮を設け、皇室の避暑地と為すと共に、東京府下悪疫流行の際に於ける避病地と為し」（宮内庁、1971、297）と離宮設置の意義を説いているのはその表れである。したがって、この離宮は、避暑と避病の意味をもち、インド・東南アジアの高原保養都市の設置目標と共通性を有していたといえる。

第5図は、1887（明治20）年当時の箱根宿を鳥観したものである。1880年に設立され塔ヶ島の箱根離宮はひときわ目立つ洋館であり、西洋の影響が認められる。手前の箱根宿と離宮の間に存在したはずの箱根関所の建物はみられず、取り払われた模様である。麓にある建物は箱根離宮に付属する厩舎であったという。箱根宿もベアトが撮影した箱根宿と較べると変化がみられる。すなわち、手前湖岸に建物のみえるのは本陣「鎌倉屋」石内（旅館）であり、その先の大きな萱葺民家が本陣の柏屋と川田と思われる。その先で湖岸に二階建ての建物がみえるのが、異人館とよばれた土生屋（はふや）であろう。このはふやが、箱根ホテルに代わるのは明治末期で、所有者が変わったのは1922年のことである。

IV-3 『日本旅行案内』にみる宮ノ下と箱根

居留地の外国人や極東の異郷を訪れる外国人にとって、日本に関する書物、特にイザベラ・バードの『日本奥地紀行』やマレーのガイドブックはよく読まれたという。日本最初の本格的ガイドブックはアーネスト・サトウとホーズにより『A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan』と

して1881（明治14）年に初版が発行され、1984年に第2版がマレー社から発行されている¹⁴⁾。鉄道の普及とともにチェンバレンとマソンによって大改訂が加えられ、『A Handbook for Travellers in Japan』として1891（明治24）年に3版が発行された。この『日本旅行案内』はロンドンのマレー社から発行されたので、いわゆる『マレーハンドブック』として知られるものである。

初版には、「宮ノ下―付近への散策と西条寺への遠足」の名の下に、「宮ノ下（ホテル富士屋：洋食、ビリヤード室のある外国式の大きな施設、奈良屋：魅力的な日本式旅館、しかし、机、椅子、ベッドもある）は温泉地として有名で、横浜から約17里、人力車で小田原経由で塔の沢へ、最後に徒歩か駕籠で急坂を上り一日の行程」（Satow and Howes, 1981, 97）等と書かれ、散策路として木賀、堂ヶ島、芦の湯と箱根、大地獄が挙げられている。しかし、第3版では「箱根地区―宮ノ下、箱根」となり、散策路も木賀、堂ヶ島、大平台、浅間山への登山、宮城野、小地獄、大地獄、明星ヶ岳、芦の湯と箱根と多くなっているが、基本的には初版と変わっていない。

しかし、箱根に関する記載は大きく変わる。初版では、箱根は「芦ノ湯と箱根」として扱われ、芦ノ湯の記載より少ない。ところが、第2版になると「箱根、宮ノ下とその近傍」となり、箱根が宮ノ下と同格で扱われている。すなわち、「箱根（旅館は柏屋、山本屋、鉢屋、米屋およびはふや、はふやの二階からは湖を見下ろせる）は、魅力的な湖の縁に位置し、円錐型の富士山の素晴らしい眺望が楽しめる。快適な湖水浴、ボートあそびができ、蚊もほとんどいない。唯一の欠点は湿気が多いことである。主な旅館ではヨーロッパ風の店と洋酒が置いてあり、夏季にはパンや新鮮な牛乳も手に入る。また、外国人向けの駕籠もたくさんある。箱根は近年東京、横浜の外国人居住者にとってお気に入りの避暑地（summer resort）になった。横浜から20里、馬車か人力車で三枚橋まで行き、そこから駕籠あるいは徒歩で登って一日で到着する」（Satow and Howes, 1984, 87）とある。また、第3版になると「箱根の主な旅館ははふや、山木屋、石内〔本陣鎌倉屋〕で全て湖に面している。しかし、その村のほとんど全ての家が夏期にふつう横浜から召し使いを連れてやってきた家族が独立家屋を一ヶ月間借り上げて住むよう目論み、貸家になっている。上等ではないが、外国の家具は手に入り、夏季には鳥肉、野菜、パン、ましてや牛乳や肉屋の生肉さえ入手できる」（Chamberlain and Mason, 1891, 105）と書かれて、滞在型避暑地の様相が補強されている。

これは、その10年前に当たる1881年にアーネストサトウ他2名と芦ノ湖畔を訪れた旅行家クロウが、「箱根は人気のある避暑地で、とくに横浜と東京の宣教師とその家族には人気がある。・・・箱根をひいきにして、派手な宮ノ下を避けている」（クロウ著岡田・武田訳、1984, 235）と書いているのと符合する。また、1992（明治25）年に出版された外国人向け写真集『The Hakone District』にも、ケンペルは「箱根は湿度が高く、不健康であるので、外国人は健康を気づかわずには住めないだろう」と誤って書いているが、「この問題に関して最近の伝導使節団には全くあてはまらない。概して夏には家いえは日本にやってきた多くの伝導使節団によって溢れんばかりに満たされている」（Ogawa & Murdoch, 1892）と記載されていることにも一致する。

さらにハンドブックに挿入の地図の初版には「宮ノ下と富士の周辺のスケッチ図」と記載され、宮ノ下が富士登山の基地としての役割を担っていた。地図は詳細になるものの、これは第2版にも踏襲

されているが、第3版になると「富士と箱根地区」となり、鉄道の記入ばかりでなく、周辺の地形も詳しくなっている。また、現在のガイドブックと同様に所要時間やホテルの料金なども記載されている。したがって、宮ノ下や箱根への旅行者や滞在者はこのハンドブックを携え、横浜の居留地ばかりでなく、東南アジア、さらにはヨーロッパやアメリカから訪れたと思われる。

V む す び

わが国に初期にやってきて居留地に住んだ外国人は、外交官アーネスト・サトウの旅行にみられるように、未知の土地、日本文化に対する好奇心・探究心が存在した。したがって、居留地から半径10里という遊歩区域という旅行範囲の制限緩和は当初からの外交問題であった。日本の近代化の指南役として御雇外国人を採用したこともあり、大使、領事など在外外国人高官を見倣い、日本政府は彼らに暑中休暇を与え、国内旅行も病氣療養・保健、学術研究に限りパスポートを発行して認可することになった。

宮ノ下は、底倉と一緒に箱根七湯の一つとして江戸時代に起源をもつ。この温泉施設、見晴らしのよい場所に立地していたのが、宮ノ下の奈良屋旅館であった。遊歩制限区域を越えてこの地を訪れた外国人のうわさを通じて、宮ノ下は休養地として評判になっていた。つまり、宮ノ下は1871(明治4)年には横浜では人気のある保養地として知られていた。1878年、藤屋旅館を買収して設立された洋式の富士屋ホテルの開業は、この地位を不動のものとした。生活水準の高かった外国人居留地横浜および御雇外国人や外国高官の住む東京を控えていたことが、アクセシビリティの向上と相まって宮ノ下を著明な高原避暑地にした。宮ノ下から芦の湯、宮城野、箱根等への散策路も開かれ、訪問客はピクニックや登山を楽しむことができた。結果的に富士屋ホテルは避暑客の社交場、情報交換の場となった。

宮ノ下の富士屋ホテルの宿泊者名簿を検討すると、顧客は日本の横浜、東京をはじめ、海外の3つの地域からなっていた(第2図参照)。第一は中国・東南アジアなど列強の植民地、特に上海、香港、シンガポール、ペナン等の都市からの訪問者であった。第二はヨーロッパでイギリス、ドイツからの訪問者が多かった。第三の地域はアメリカ合衆国で、ニューヨークとサンフランシスコに特化していたが、全域に渡っていた。また、長期滞在者は時代の進行とともに減少傾向にあり、短期滞在者が増大するようになった。短期滞在者の中には横浜、東京、神戸の友人を尋ねた外国人および世界バック旅行の参加者が存在した。なお、長期滞在者は宮ノ下の喧騒を逃れ、宮ノ下より標高が高く涼しい、料金の安い箱根を利用するようになった。

江戸時代に人工的に設置された関所の宿場町箱根は、往時200戸に達したが、宿駅制度の廃止とともに衰退し、1902年には戸数がほぼ半数の90戸になってしまった。しかし、この町の衰退に歯止めをかけたのが、外国人の滞在であった。すなわち、日本人の宿泊者の減少を相殺して箱根宿の本陣、旅籠を外国人家族が夏季に借り上げて避暑するようになったのである。柳田国男は1907年、その様相を「高地を好める西洋人は遠近の開港場より群集して、茲に避暑部落を作り、ボートは蘆の湖に浮び、破風屋は箱根ホテルとなり、ペンキは盛んに尋常の民家を塗抹し、湯治場の客も遊びに来れり。昔の

賑ひに比するときは、固より十の一にも達せざれど、兎に角町民歳計の一半は之に依って始めて支持することを得たり。・・・夏季の稼ぎ高は同時に秋冬の費用に充つるに足る。故に箱根の郵便局は、必ずしも繪葉書の消印のみを以て能事とせず、貯金の事務に於いても亦頗る多忙なり」(柳田, 1962, 368-369) と書いている。

一方、『日本旅行案内』の第3版によれば、「避暑地として箱根と宮ノ下のどちらに利点があるかという論争が両地の訪問者間でたえず戦わされた。宮ノ下は温泉があり、箱根より空気が乾燥しており、早く行けるし、洋風のホテルもある。箱根は宮ノ下より1000フィート高いので涼しく、プライバシーが保てる。湖水浴やボート遊びのできる魅力的な湖がある。また、冬は宮ノ下に利点があることで一致している」(Chamberlain and Mason, 1891, 105) と記載され、宮ノ下が周年型のリゾートであったことを明らかにしている。第4版では箱根に「富士山の眺め(湖水に写る逆さ富士)も大きな魅力である」と付け加えられている。この宮ノ下と箱根の関係は、日光と中禅寺湖畔との関係に類似しているといえよう(斎藤, 1991)。

ともあれ、宮ノ下と箱根は軽井沢以前の、日本の最初の高原避暑地として発展した。外国人居留地横浜と首都東京に物理的に近かったことが、鉄道、道路、チェアーなどアクセシビリティの増加とともに、訪問客を増大させる結果となった。しかし、東海道線などの国鉄の開通と延長は、宮ノ下や箱根と東京・横浜とのアクセシビリティを高めると同時に、東京、横浜から遠隔地にあるが、日光や軽井沢など標高の高い避暑地を発達させる原因ともなった。しかし、軽井沢を含め日本で高原保養地として発展したのは、そこに寺院、宿場町などの遊休の既存の宿泊施設が存在したところに限られていたといえよう¹⁵⁾。

本稿の作成にあたり、横浜開港資料館、箱根町郷土資料館、小田原市立図書館、富士屋ホテル等で資料の閲覧、あるいは貴重な資料の提供を受けた。とくに箱根町郷土資料館の鈴木康弘学芸員には文献の教示を頂いた。また、図のトレースは本学の技宮宮坂和人氏にお願いした。記して感謝したい。なお、調査の一部に文部省科学研究費一般研究B(課題番号, 0541135:代表, 斎藤 功)を使用した。

註

1) シムラを夏の首都と決めたインド総督ローレンス卿は、カルカッタからシムラへの移動で経費がかさむという反対論者に「私はここでの一日の仕事が低地のカルカッタでの仕事の5日以上に相当するものと確信する」と言われたという(Kanwar, 1990, 38)。

2) サンドウィズは「宮ノ下は横浜の居住者にとって人気のある高原避暑地で、日本における最上のホテルがあり、快適な気候、美しい景色、温泉療養にめぐまれている」と書いている。時代が新しくなるにつれて避暑地の数も多くなる。たとえば、スペンサーとトーマスは、日本の避暑地として那須、日光、中禅寺湖、日光

湯本、赤倉、野尻湖、草津、軽井沢、諏訪湖、箱根、六甲山、雲仙など12ヶ所を挙げている(Spencer and Thomas, 1948, Fig. 1, 643)。

3) 大正期からの箱根の観光地化については山村(1970)等によって考察されている。

4) ヴェダー(Veeder, 1889)は、東京から見える主要な山として、富士山、武甲山、浅間山、男体山、筑波山をあげ、加賀屋敷(現東大)からの透視度を計測している。

5) 箱根温泉旅館協同組合編(1986):『箱根温泉史』の92ページの表「外国人宿泊客(明治15年)」より判

断した。なお、この統計は何日滞在しても一人と数えたので、外国人の延べ宿泊日数はもっと多いと考えられる。

6) 例えば、三角ホテルを買収して本格的ホテル業に乗り出した金谷ホテルの二代目当主金谷慎一は1893(明治26)年頃の思い出として「この頃から日本のホテル事業には、ガイド禍が襲い始めた。この時分日本には英語を話せる人が少なかった。従って日本の未開さに興味をもって訪ねて来る外国の観光客を案内するガイドの商売は、時代の要求を反映したものとして比較的収入もよかった。・・・ホテル事業をやるものは、ガイドに頼らなければならなかった。ガイドは独裁者の様に振舞って、ホテルの料理に迄干渉する様になって来た。そしてホテルの経営迄も、ガイドの掌中に握られて居る有様であった。勿論ホテルの支払いの何%かは、ガイドの収入にとられる他に、コミッションを公然として請求する始末であった。一度これの機嫌を損ずると客を連れて来てくれない」(金谷, 1954, 23-24)と書かれている。なお、同氏の弟は富士屋ホテルに入婿し、富士屋ホテルの二代目社長となった山口正造氏である。

7) 富士屋ホテルから奈良屋旅館に支払われた報酬金は年額参百円であり、清国人および印度人は外国人に含まれていなかった。なお、1895年の宿泊者名簿(Register book)には、氏名、母国、居住地の後に部屋番号が記載されているが、所々に奈良屋(Naraya)の記載がみられ、上記の協定を証明するものと思われる。

8) 富士屋ホテルの宿泊者名簿を分析したものに、箱根町郷土資料館(1987)が存在するが、宿泊者名簿の分類に留まり、宿泊者の本格的分析には至っていない。なお、1999年の資料は2つの形式があり、名簿に氏名の重複はなかったが、1ページ3名記載のものは使用しなかった。しかし、使用した1999年の資料には8月20-9月4日の欠損が存在したものの、資料の比較の都合上使用した。

9) たとえば、周遊旅行としてウィリアムスは、1885年中国の汕頭から、横浜-東京-日光-伊香保-草津-善光寺-上田-岐阜-美濃という周遊ルートが存在したことを挙げている(Williams, 1958, 155)。

10) 同じ外務省の資料を用いて安島・十代田(1991)は、ほぼ同じ図(図10, 39)を描いているが、地理的視

点からみると御殿場が抜けているなど十分とはいえない。

11) 1889(明治22)年当時の箱根名所図絵によれば、平松別荘がみはらし別荘とともに記載されている。なお、ベルツは子息荒井徳之助の名義で神奈川県葉山に宅地(2筆)、田(1)、畑(4)、山林(2)、芝地(1)を所有し、草津に宅地(2)、畑(3)、原(2)を所有していた。これは日本の妻と子供達への生活・学資資金の糧とするためのものであった。

12) この名簿の最後は1896年であるというが、興味ある人物としてウィリアムスは、1871年のヘボン、1872年のコーンズ商会創立者コーンズ、1873年の大阪鉄工所の創立者ハンターおよびアメリカの批評家フェノロサを挙げている(Williams, 1958, 155)。なお、ハンターは中禅寺湖畔に別荘を設立し、中禅寺湖を高原保養地にしようとした中心人物であった(斎藤, 1991)。

13) ベルツは、「軽井沢は気候の乾燥したことで知られており、夏は外人が多数訪れる。主としてアングロ・サクソン系の新教伝道者で、めんどうな仕事の労苦を、ここで三カ月滞在していやさねばならないそうだ。だがしかし、信者たちは下界で汗を流して、日ごろの精神的慰安を満足することを考えていればよいのだ。これだから自分は、かれら宣教師に好意がもてないのであって、自分には何一つとして犠牲を課することなく、教えに従わずして貧をいとい、高原に別荘を構えてスポーツにふけり、あらゆる点で紳士にひけをとるまいと努めているのだ」(ベルツ著菅沼訳, 1979, 下, 174)と新教宣教師に批判的であった。

14) アーネスト・サトウは明治初期に精力的に日本各地を旅行し(庄田, 1992)、ホーズとともに1881(明治14)年早くも「中央・北部日本の旅行案内」を刊行した。本シリーズの記載は正確で、特に山岳地域の記載は、志賀重昂の『日本風景論』の元となったと言われている(楠家, 1990)。

15) 軽井沢会の会長服部禮二郎氏の教示による。同氏は、明治初期に外国人が訪れた大山、日光などは廃仏毀釈による利用の無くなった宿坊の再利用、箱根、軽井沢などは参勤交替の廃止によって宿泊者の無くなった旅籠の再利用、つまり廃物利用であったと考えている。

参 考 文 献

- 足柄下郡教育会編(1929)：『足柄下郡史』足柄下郡教育会, 310p.
- 石井 孝(1977)：『明治維新の国際関係』吉川弘文館, 358p.
- 市川健夫(1966)：軽井沢の避暑集落. 『高冷地の地理学』令文社, 209-232p.
- 大町桂月(1922)：『桂月全集第3巻』興文社, 798p.
- 小笠原清編(1990)：『一枚の古い写真—小田原近代史の光と影』小田原市立図書館, 322p.
- 外務省(1892)：『外国人ニシテ日本人ノ名義ヲ以テ土地家屋ヲ所有並ニ会社ヲ設ケ商業ヲ営ムモノノ調査』35p.
- 外務省編纂(1955)：『日本外交文書(8)第五巻』日本外交文書布會, 652p.
- 金谷慎一(1954)：『ホテルと共に七拾五年』金谷ホテル株式会社, 90p.
- 楠家重敏(1978)：外国人の日本研究における『日本旅行案内』の位置. 『チェンバレンの明治旅行案内』新人物往来社, 221-234.
- 宮内庁(1969)：『明治天皇紀 第三』吉川弘文館, 744p.
- 宮内庁(1971)：『明治天皇紀 第六』吉川弘文館, 868p.
- 児島 豊(1991)：『箱根と外国人』神奈川新聞社, 212p.
- 斎藤 功・陳 憲明(1984)：台湾中央山地における温帯落葉果樹・高冷地野菜栽培の発展. 人文地理学研究, 8, 141-180.
- 斎藤 功(1990a)：熱帯の避暑集落と温帯野菜栽培. 斎藤・野上・三上編『地理学講座3 環境と生態』古今書院, 215-233.
- 斎藤 功(1990b)：北スマトラ, カロ高原における観光化と温帯野菜栽培の発展. 人文地理学研究, 13, 1-23.
- 斎藤 功(1991)：外国人によるブナ帯風土の発見—軽井沢以前の避暑地の一コマ—. 市川健夫編『日本の風土と文化』古今書院, 164-179.
- 佐藤孝一編(1911)：『かるみざわ』教文館, 374p. 1987年復刻(国書刊行会).
- 庄田元男(1992)：解説. 『日本旅行日記1』平凡社, 281-316.
- 田中啓爾(1934)：軽井沢における内外人の生活. 地理学, 3(2), 322-330.
- 中川浩一(1985)：『観光の文化史』筑摩書房, 287p.
- 中村静夫(1979)：『箱根宿歴史地図—江戸時代復元図と対照用現在図』中村地図研究所.
- 箱根温泉旅館協同組合編(1986)：『箱根温泉史』ぎょうせい, 452p.
- 箱根町立郷土資料館(1987)：宮ノ下富士屋ホテル調査概報(Ⅱ). 館報, 4, 16-29.
- 富士屋ホテル株式会社(1958)：『富士屋ホテル八十年史』富士屋ホテル株式会社, 634p.
- 宮原安春(1991)：『軽井沢物語』講談社, 444p.
- 安島博幸・十代田朗(1991)：『日本別荘史ノート』住まいの図書館, 307p.
- 柳田国男(1907)：箱根の宿. 『定本柳田國男集第2巻』1962, 366-372.
- 山村順次(1970)：箱根における温泉観光地域の形成—中央観光資本の展開過程を中心に—. 大東文化大学紀要, 8, 1-34.
- 横浜開港資料館編(1988)：『横浜もののはじめ考』横浜開港資料普及協会, 188p.
- オールコック著 山口光朔訳(1962)：『大君の都』中, 岩波書店, 433p. (Alcock, R. (1863) : The Capital of the Tycoon. New York)
- クライトナー著 大林太良監修 小谷裕幸・森田明訳(1992)：『東洋紀行1』平凡社, 358p. (Creitner, G. (1881) : Im fernen Osten)
- クロウ著 岡田章雄・武田万里子訳(1984)：『クロウ内陸紀行』雄松堂, 336p. (Crow, A. (1883) : Highways and Byways in Japan. London)
- ケンペル著 斎藤 信訳(1977)：『江戸参府旅行日記』平凡社, 371p.
- コータツツイ著 中須賀哲朗訳(1988)『維新の港の英人たち』中央公論社, 461p. (Cortazzi, Sir Hugh (1987) : Victorians in Japan: In and Around the Treaty Ports. The Athlone Press, London, 361p.)
- サトウ著 坂田精一訳(1960)：『一外交官のみた明治維新(上)』岩波書店, 290p. (Satow, E. (1921) : A Diplomat in Japan, London, Racy Service)
- サトウ著 庄田元男訳(1992)：『日本旅行日記2』平凡社, 334p.
- ダヌタン著 長岡祥三訳(1992)：『ベルギー公使夫人の明治日記』中央公論社, 426p. (d'Anethan, E.M. (1912) : Fourteen Years of Diplomatic Life in Japan. New York, 471p.)
- ディキンズ著 高梨健吉訳(1992)：『パークス伝』平凡社, 371p. (Dickins, F. (1894) : The Life of Sir Harry Parks. London, Macmillan and Co.)
- ヒュースケン著 青木枝朗訳(1989)：『ヒュースケ

- ンの日本日記』岩波書店, 322p.
- ヒューブナー著 市川慎一・松本雅弘訳 (1988) 『オー
ストリア外交官の明治維新』新人物往来社, 276p.
(Hubner, A. (1877) : Promenade autour du Monde.
1871, Hachette)
- ブラック著 ねずまさし・小池晴子訳 (1970) : 『ヤ
ング・ジャパン 1, 2, 3』平凡社, 278p. 246p.,
312p. (Black, J. (1880) : Yong Japan. London,
Trubnet & Co.)
- フレイザー著 コータッツィ編 横山俊夫訳 (1988)
『英国公使夫人のみた明治日本』淡交社, 348p.
(Fraser, M. (1899) : A Diplomat's Wife in Japan:
Letters from Home to Home. Hutchinson, London)
- ベルツ編 菅沼竜太郎訳 (1979) : 『ベルツの日記』
(上下) 岩波書店, 374p. 429p.
- モール著 金森誠也訳 (1988) 『ドイツ貴族の明治宮
廷記』新人物往来社, 206p. (Mohl, O. Von (1904) :
Am japanischen Hofe. Berlin)
- Chamberlain, B.H. and Mason, W.B. (1891) : A Hand-
book for Travellers in Japan. London, Murray, 495p
(Third Edition) .
- Kanwar, P. (1990) : Imperial Simla. Oxford Uni-
versity Press, Delhi, 316p.
- Ogawa, K. & Murdoch, J. (1892) : The Hakone District
(Illustrated) . 小川一真, 38p.
- Reed, R. (1976a) : City of Pines: The Origin of Baguio
as Colonial Hill Station and Regional Capital. Univ.
of California, Berkeley, Research monograph, 3,
189p.
- Reed, R. (1976b) : Colonial Genesis of Hill Station:
The Genting exception. Geographical Review, 79,
463-468.
- Sandwith, F. (1907) : Hill Stations and Health Resorts
in the British Tropics. Journal of Tropical Medicine
and Hygiene, 10, 361-370.
- Satow, E. and Hawes, A. (1881) : A Handbook for
Travellers in Central & Northern Japan. Kelly and
Co., Yokohama, 489p (First edition) .
- Satow, E. and Hawes, A. (1884) : ----- Murray,
London, 586p (2nd edition) .
- Spencer, J. and Thomas, W. (1948) : The Hill Station
and Summer Resorts of the Orient. Geographical Re-
view, 38, 637-651.
- Veeder, P.V. (1889) : Results of Observation of the
Visibility of Five of the Principal Mountains seen
from Tokyo. Transactions of Asiatic Society of
Japan, 7, 87-90.
- Williams, H. (1958) : The Foreign Settlements in
Japan. Charles E. Tuttle, 351p.

Miyanoshita and Hakone as the First Hill Stations in Japan

Isao SAITO

European people established hill stations or mountain resorts in Colonial India and Dutch Indies in the early 19th century. The hill station diffused throughout Southeast Asia, and reached even China and Japan. Karuizawa is the most famous hill resort in Japan, although some hill resorts were established before Karuizawa was.

Japan opened 7 ports by signing the Treaty of Commerce and Friendship with England and other countries in 1858. Among the ports, Yokohama and Kobe were the most prosperous. Marchants, businessmen and workers from overseas restricted their residence to the foreign settlements, attached to the ports. Their walks and excursions were also restricted within 40 kilometers radius from the settlements except diplomatic persons. But early foreigners were anxious to exceed the line to see and research the unknown land. As Japanese government employed *the yatoi*, or invited foreign teachers and engineers, the diplomatic staffs lead them to resorts from 1873. They enjoyed excursion over this line with taking permission of travel passports in order to restore their health.

In this paper the author makes clear the features and early landscapes of Miyanoshita and Hakone as the first hill stations in Japan by analysing the travel records, diaries of foreigners and photographs. As a result, he clarified following characteristics common to the hill stations of the Orient.

Miyanoshita was one of the spa villages in Hakone District. It became an attractive summer resort since 1872 as Earnest Satow, or English diplomat, wrote. In 1878 Fujiya Hotel, a western style hotel, opened by taking over an old Japanese style inn with hot springs. High humidity in summer forced the foreign residents to go to Miyanoshita, the nearest mountain from Yokohama and Tokyo. Moreover, Miyanoshita attracted foreign vacationers from China, colonial Southeast Asia, Europe and United States of America. Thus, Miyanoshita became one of the international summer resorts and Fujiya Hotel became an international social saloon and an information exchange center, even in winter. As the time went on, it was a tendency that Miyanoshita had short stay visitors and vacationers stayed in Hakone instead of Miyanoshita.

On the other hand, Hakone, an artificial barrier and an inn village on the Tokaido street, has declined with the abolition of feudal transport system. But foreign visitors stayed the village and stopped the desertation. In the late 19th century Hakone became a favourite summer resort for foreign residents of Yokohama and Tokyo. As families with their own servants and members of the missions from Yokohama and other cities were to hire a separate residence by the month, nearly every house in the Hakone village is to let during the summer season. Some people wrote that Hakone was extremely moderate charges and good accommodation for vacationers.

According to *A Handbook for Travellers in Japan* in 1891 (Third edition), "The respective merits of Hakone and Miyanoshita as summer resorts form a constant subject of between the partisans of the two places. Miyanoshita has the advantage of hot springs, a drier air, easier access, and hotels in European style. Hakone is cooler, being 1,000 ft. higher, it affords more privacy, and has a charming lake where one may bathe and boat and go on water picnics. In winter the advantage is altogether on Miyanoshita's side." These sentences means the Miyanoshita was the year round hill station at that time. The physical and social relations between Miyanoshita and Hakone were followed by other hill resorts, Nikko and Lake Chuzenji.

Above all, Miyanoshita and Hakone developed as the first hill stations in Japan. The nearest physical distance to the hill stations, Miyanoshita and Hakone, resulted the increase of the visitors from prosperous foreign settlements in Yokohama and Tokyo. However, expansion of railway system were responsible not only for improvement of accessibility to Miyanoshita and Hakone, but also for the development of summer resorts in remote areas.

Though politicians, noble persons and successful merchants constructed the bangalows in these hill stations, governmental facilities did not moved there in Japan. However, summer resorts in the late 19th century had characteristics common to have idle housing facilities such as shrines, temples, and inn towns.